

## 編集後記

『言語文化』第三八号をお届けする。今号の特集は、ドイツ語圏の美術史を専門とする研究者の方々の論考をまとめた『歴史の中の美術』である。

本企画はもと二〇二〇年三月末をもって本学文学部芸術学科を退任された大原まゆみ名誉教授の最終講義として同月七日に開催予定だった小講演のイベントである。残念なことに、新型コロナウイルス感染症の第一波が急速な拡大を見せ始めた時期に重なってしまい、感染予防・拡散防止のため中止という苦渋の決断となった。執筆者は若干変つているが、ここに小講演集として掲載するものである。この経緯と企画概要については、大原氏の「ご挨拶と執筆者紹介」に詳しいので、そちらを参照されたい。

大原名誉教授は、本学に一九九七年に

教授として着任されて以来、三十年以上に亘り、芸術学科美術史学コース西洋美術史担当教員として活躍されてきた。在職中にドイツ語圏美術史研究連絡網を立ち上げられ、一連のシンポジウム『戦争と美術』、『デューラー受容史五〇〇年』、『植物を描く／植物で描く』、『創造・伝達・記憶の場としての版画』、『ドイツ美術とプロテスタンティズム』を主催され、その記録の多くは『言語文化』の特集として掲載され、言語文化研究所の活動にも貢献された。今号にご寄稿いただいた各氏にお礼を申し上げるとともに、大原氏の長年の貢献と業績を称え、感謝申し上げます。

本紀要は言語文化研究所の各年度の活動報告も兼ねているが、残念ながら、今年度はコロナ禍において多くの企画が延期を余儀なくされた。特にシンポジウムなど不特定多数の観衆が集まるイベントや、海外からのゲストを迎える企画は現在に至るまで、実施困難な状態が続い

ている。今年度五月以降に研究所所員による企画として開催予定だったフランス、米国、また沖縄と国内外からのゲストをお招きとしての講演会やシンポジウムなども残念ながら延期となった。

昨年度の「編集後記」でも延期を伝え、西堂行人氏（芸術学科教授）企画による「持続可能な唐十郎演劇」と本多まりえ氏（英文学科准教授）の企画「メディアと子供 児童文学のトランスカルチュラルな展開」については、前者は延期が続いているが、後者は担当が貞廣真紀氏（英文学科准教授）に代わり、年度を跨いだ三月十四日にオンライン開催される予定である。

大学や美術館、文学館、学会も含めて多くの研究・教育機関では、対面開催の代わりにオンライン型に形態を変え、活動を停止させることなく継続しているが、本研究所でもオンライン開催の方向性については今後積極的に検討していくことが望まれるだろう。いずれも状況を見極

めながら、来年度に実現可能な形での可能性を探っていきたい。今後の活動については、言語文化研究所ホームページのお知らせ、詳細を確認いただきたい。

また、研究所の重要な活動の一部である読書会のうち、「ホメーロス研究会」と「スワヒリ語講座」はオンライン開催で継続しているが、対面を前提とする「古典ギリシア語初歩文法」は残念ながら休講となった。基本的に対面講座に関して、大学の授業に対する方針を踏襲して決めていく予定である。こちらもホームページで情報をチェックされたい。

個人的な感想になるが、やはりコロナ禍の一年について思うところを少し書かせていただきたい。

様々なところで、新型コロナウイルス感染症によって「世界が変わってしまった」「二度と戻らない日常」「ニューノーマル」「戦争」「コロナ禍」「緊急事態宣言」というような言葉がまことしやかに主張され、一年以上続く「緊急事態の永続化」

の中で教育機関である大学も抜本的な対応を迫られた。

特に春学期はほぼ全世界の教育機関でオンライン対応を迫られ、多数、少数にかかわらず、学生が教室に集まり、授業を受け、共通の「場」と「時間」を共有するという経験は根本から覆されるようになった(その状況は多くの大学で来年度も続くと思われる)。新入生は、一度もキャンパスに来ることないままに、コンピュータやタブレット、あるいはスマホといった機器の小さなスクリーンを唯一の他者とのコミュニケーションや教育の回路として繋がらざるを得なくなつた。最初は何とか頑張ってきた学生たちが春学期の終わりが近づくにつれて、疲労困憊していく様子が顕著になり、友人在りできない、一人で辛いといったコメントに心が痛んだ。

教員にとっても、コンピュータやインターネットという情報やメディアとの距離や関係をどのように持っていたかによって、その対応が大きく異なるようにな

つた。特にベテラン教員の中には、それまで培ってきた教育や研究の手法を全て零次元に戻し、新たな方法を探り、果敢にチャレンジする者もいれば、なかなかそのような劇的な転換はできないものの、工夫を凝らして、学生とのコミュニケーションを図る者もいただろう。秋学期以降には、対面授業も可能になり、ハイブリッド型、ZOOMなどを使った双方向授業という選択肢も広がり、まがりなりにも学生と現実の「時空間」を共有することもまた可能になってきている。実際、秋学期になると学生たちも徐々に新しい授業形態に慣れてきたようで、学生たちの高い順応性とレジリエンスにも目を見張った。とはいえ、ワクチン接種が広範囲に広がるまでは、このような教育形態は続くだろう。

このような急激な環境の変化を前にして、学生にとっても「大学」に何を期待するのか、「大学」で何を学ぶかを考える機会になつただろうし、教育・研究に携わる私たちも、何のための研究か、何

のための教育か、大学や研究所の使命は何か、改めて考えることが期待されているし、私たちはそれに応える責任がある。

ところで「ことば」や「文化」を研究の対象としている私たちにとつても、こうした新しい現実はさまざまな問いを投げかける。例えば、声が発する音や空気の振動、その声が発する身体の体温が、仮想空間という回路を経るとどのように変わるのか。声として発せられることばは、「文字」や「言語」という別のメディアウムを介して文学になり、あるいは映像になり「変容」し、「越境」してきたが、オンラインという新たな疑似的<sup>シミュラコネイ</sup>同時性を獲得したときに、意味作用自体も変容する

のか。また身体や皮膚が触れあう触覚的な経験が、物理的な「空間」や「時間」のズレを、メディアや媒体の回路が回収してしまう事態に陥ったときに、そもそも「現象」はどのように経験されるのか。私たちはせめてこうした問いと向き合うことで、コロナの「災い転じて福となす」知恵を持ち合わせていけると思いたい。

このような特殊な状況下でも今号をお届けし、研究所の活動の継続性を維持し、また所長としての拙いオンライン会議などを無事終えられたのは、ひとえに研究所委員の皆さんと研究所事務担当の伊東絢さんの協力と尽力あつてである。ここに感謝したい。

最後に悲しいお知らせをお伝えしたい。明治学院大学文学部芸術学科を二〇〇一年に退任され、言語文化研究所の活動にも多大な貢献をされた宇波彰名誉教授が本年一月六日に八十七歳で逝去された。個人的な話になるが、コロナ禍で去年はお会いできなかったが、お元気なご様子をお知らせしてお知らせしてください。お亡くなりになった当日消印の寒中見舞いのお手紙を頂いていたので、計報には本当に驚き、ショックだった。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(斉藤綾子)